

「大人による乳児の座位姿勢保持が寝返りおよび座位の獲得過程に及ぼす影響」

カルマール 良子（美作大学短期大学部）、梅澤 雅和（東京理科大学）

キーワード： 乳児，自発性，運動発達，寝返り，座位

【背景】我々は過去に、乳児期の運動発達「はいはい」動作を分類し、中でも「四つ這い」獲得の重要性に着目し、その獲得率と育児用品の使用状況について報告した。さらに、乳児の「シャフリング」生起率や「座位」獲得過程について、保護者の意識との関連等を検証した。これらの結果から、乳児期早期に自発運動の機会が制限されることが、発達順序の入れかわりや、飛越しを生じさせているのではないかと、の仮説を設定した。

【目的】本研究は、乳児が生後初めて経験する移動運動、仰向けから、うつ伏せ姿勢への寝返り、ずり這い、四つ這い、座位獲得までの過程のうち、寝返りと座位の獲得時期と、大人の介入としてのおすわりの練習の有無および開始時期の関連性を検討することを目的として行った。

【方法】調査期間は、2021年12月～2022年4月にアンケート調査を行った。対象は、岡山県、鳥取県、兵庫県の乳児の保護者823名中、歩行を獲得し、データに欠損のなかった671名を対象とした。保護者が所持している母子手帳を参考に選択式で回答できる19項目（性別・月齢・出生時の状況・独歩までの各粗大運動発達の獲得月齢・おすわり練習有無および開始月齢等）とした。ハンガリーの医師Pikler(1971,1973)が実践検証した乳児の自発的な座位獲得過程を参考に、「寝返り」→「座位」の順序で獲得したパターンを《寝返り先行群》、「座位」→「寝返り」の順序で獲得したパターンを《座位先行群》とし、各群についてそれらの獲得月齢およびおすわり練習の開始月齢を比較した。本研究は、美作大学研究倫理委員会令和3年第2021-11号の承認を受けた上で実施した。

【結果と考察】解析対象とした671名のうち《寝返り先行群》は89.7%（602人）、《座位先行群》は10.3%（69人）であった。寝返り開始月齢は、寝返り先行群（ 4.5 ± 1.1 ヶ月）に対して座位先行群（ 6.6 ± 1.2 ヶ月）では顕著に遅かった。おすわりの練習の開始月齢は、寝返り先行群（ 5.9 ± 1.2 ヶ月）に対して座位先行群（ 5.2 ± 1.0 ヶ月）では早い傾向であった。したがって、大人による乳児の受動的な座位姿勢獲得の存在が明らかとなった。また、乳児早期に床面で乳児の自発的な姿勢で過ごすか、あるいは保護者によって置かれた姿勢で過ごすかによって、乳児の発達過程に影響を及ぼす可能性が考えられた。